10年後のあるべき姿について、人口減少社会に置いて、AI・ロボットの活用加速に向けた教育や、若者がUターンしたくなる環境づくりの必要性が議論された

2/12（木）検討懇話会 主な発言

あるべき姿検討方法	■ 10年前～現在の姫路市・播磨の変化を確認できると、今後10年間でどのような成長が必要か考えやすい
教育	■ 勤勉さが戦後日本の成長源泉である。勤勉＝従来型労働に限らない。**人口減少の10年後はAI・ロボットの活用加速が必要であり、そのためにも教育が重要** ■ 幼少期から姫路の産業・魅力を教育することで、姫路市に残る人を増やせるのではないか
子育て・女性活躍	■ 子どもが少ない、交通手段が少ない等の理由で、中心部以外での子育てが難しい ■ 学校教育だけでなく、家庭教育や、行政・各機関が横連携して女性活躍を推進することが必要 ■ 30代等が**姫路にUターンしたいと思うように、子育て環境・女性の労働環境を魅力的に**できるとよい
人手不足	■ 姫路市商店街の小売業はアルバイト採用に苦戦。神戸･大阪への通学者が多く、高時給の都市に人手が流出 ■ 担い手不足で、5年後に姫路市産たけのこは無くなると言われている ■ 企業は事業･業務の幅を広げたいが人手が足りない。**転出した若者がUターンしたくなる環境づくり**が必要 ■ **高価な商品なら、全国で公募することで担い手を見つけられるのでは**ないか※包丁の越境EC販売で成功した事業者が、製造者不足を補うために包丁製造を教える学校を作り、学校で作らせた包丁をまた世界中で売っているという事例がある

人手不足解消や、AI活用社会への移行過程に、外国人材を活用することが提案された。地場産業振興のためにも、姫路のアイコンを定めPRすることが必要

2/12（木）検討懇話会 主な発言

外国人材受入	■ **人手不足解消のために、姫路市が”海外人材が来訪し学ぶことができる代表地域”を目指すことを提案** 　■ アフリカでは日本の製造業技術の習得を望む人が多く、国も技術力習得を後押ししている 　■ アフリカは平均年齢20代で身体を使う労働に向いている。人件費も日本より低い水準 　■ まずは現地で学び、実務が身についた段階で日本に送る、という手法も取りうる 　■ 技術レベル、言語・文化障壁、生活水準・何人規模で受け入れるのか、等々、検討事項は多い 　■ 例えば金融機関等は日本語能力が重要なため、アフリカ人材を受け入れることは難しい ■ **「姫路市と言えばこれだよね」と思われるよう、アピールしたい文化を定めて発信**し、世界中の人が姫路市に興味を持ち、日本語を学び、日本で生活しやすくなると理想的 ■ グローバル人材育成コンソーシアムを立ち上げ、受入を検討中である。テストケースとして台湾の人材に一度来訪してもらい、市企業と交流してもらう予定。また、姫路市学生を台湾に送ることも検討
ロボット・AI活用	■ **VLAを活用し一部作業をロボットに任せていけるとよい。一方でAI導入初期には人手が必要**である 　■ AI導入初期は、裏でアフリカやフィリピンの人が作業しているケースが多い。その過程でデータを貯めた後に、最終的に自律的にロボットを動かす 　■ 導入の過程で必要な雇用にも、外国人材を充てることができる 　■ ルワンダやエジプトは、「日本でニーズがあるが、使える人材が日本に少ない領域・言語」に強い
地場産業	■ 姫路市にはポテンシャルがある。”姫路城”というアイコンがあり、欧米から多くの人が来訪し、地場産業として生きた技術が蓄積されている。目下の人手不足対応も重要だが、**10年先を目指す上では、地場産業を革新し、10年後の伝統産業を形成することが重要** 　■ 姫路に、世界初の学位を授与する教育機関を設けることも一案。古き良き産業が残る京都と違い、生きた地域産業があるという強みを活かし、ヘリテージクラフトを作るディレクターを育ててはどうか

※灰色は事務局の発言